続・極私的市民運動の記録
＜その２＞広島で被爆・孫振斗さんの裁判

●

一九七〇年一二月三日、孫振斗（ソンチンヅウ）さんは、釜山から佐賀県唐津にやってきた。「密航」だ。捕まった。普通は、大村収容所に送られて強制送還される。

が、孫さんは、マスコミの知るところとなった。新聞にでた。「私は被爆者だ。元の体にもどしてほしい」

そのマスコミは、後に広島市長になった平岡敬さんらだ。孫さんを支援するグループが福岡、長崎、広島、大阪、京都、東京にできた。全国連絡会的組織？もいちおうできた。私の孫振斗ダンボールをみたら、各地の通信がだいぶ？残っている。全国連の通

信もある。一五年ほど前、岡山大学の高谷幸さんが見たいというのでダンボールごとお貸しした。全部、ＰＤＦファイルにしてくださった。ＰＤＦファイルになるとホームページにアップしやすくなるので、そのうち？「六甲アーカイブ」にアップしようなかと考えている。

京都のグループは、当時学生だった市場淳子さんたちだ。いま、韓国の原爆被害者を救援する市民の会の代表をされている。その市民の会のために二年前文章を書いた。

「市民の会の最初のころ

市民の会 50 年、もう半世紀前のことなのですね。私は学生時代に孫振斗さんの支援運動にかかわりました。その続き（？）だったのでしょうか、市民の会の最初のころにウロウロしていたのだと思います。

もとよし（元吉？）代表が神戸の方で、神戸での会議も多かったように思います。事務局の中心メンバーであった松井義子さん、関藤仁志さんらが無教会のクリスチャンだったように思います。関藤さんは、神戸学生青年センターにも関係がある方で、個人的には私の仲人のような方でした。結婚後の新居も関藤さん紹介のアパートで、徒歩一分というところでした。

市民の会ニュースは、印刷所に依頼するきちんとしたもので、今のパソコン印刷とことなり、校正も同じ字数でおこなうということでした。仮印刷のニュースの上にセロハン紙をおいて、当時朝日新聞の若手記者であった小田川さんが、なれた手つきで校正されていました。どんな会議の流れだったのか、小田川さんの下

宿で、猪八戒さんと豚足をほおばった記憶もあります。

市場淳子さんらは当時孫振斗支援運動の京都グループで、福岡の孫振斗裁判にもいっしょに出かけていたのでしょうか？　韓国援護協会の辛泳洙さん、郭貴勲さんにもお会いする機会の多かったように思います。郭貴勲さん支援の最初のちらし（？）がありましたので添付ファイルで送ります。（二〇二二年四月一二日）」

●

私は、大阪のグループのメンバーとなった。連絡先は、大阪十三（なんで、じゅうそうと読めるのだろう）の田中裕さん宅。田中宏さんではない。会議は、阪急。服部駅近くの U さんのマンションでしていた。ほぼ毎月一回。泊りがけの時もあったが、神戸に帰ることの方が多かった。当時私は、神戸市垂水区多聞台に住んでいた。JR 舞子駅（国鉄だろうな）からバスで二〇分。最終バスが九時ごろだったので帰れず、石屋川（神戸）のむくげの会・堀内稔さんのアパートに泊めてもらった。多いときには、週三回？泊めてもらった。

孫振斗裁判は、ふたつ。①強制送還をやめさせる、②原爆手帳をもらう、だ。①は、少々ややこしいが、裁判中に強制送還されたらこまるので、「執行停止」裁判も同時並行的にした。この①は、普通は勝てない。孫振斗さんの場合も勝てなかった。が、強制送還はされなかった。その関係はなかなか説明ができないので本エッセイでは省略だ。

②が、本来の目的の裁判だ。原爆手帳は、被爆の事実を証明する二名の証言が必要だ。親戚ではいけない。孫さんの場合はすぐ

に見つかった。あと、厚生省は、「密航者はだめ」「日本に住所がないのでだめ」などと主張していた。

福岡地方裁判所で一九七五年七月七日、孫さんは勝った。私はその裁判に二か月に一度程度開かれる裁判に傍聴した。大阪グループで平日裁判に行けるのは学生の私だけだった。交通費は、会から半額支給された。先のエッセイで書いた向井孝さんの「切符」のお世話になったこともある。さらに、独自の「キセル乗車」に成功したこともある。独自の方法については、エッセイ「列車、のるかそるか」（二〇二四年一〇月）に書いた。もう時効なので、何を書いてもいい？

孫振斗裁判は、一九七一年スタート。最初のころ、新幹線はない。夜行列車で帰るときは、下関までいった駅裏の居酒屋で飲んでから、乗ったこともある。時間待ちで、ビールの匂いに寄って来る？蚊に悩まされたこともある。

新幹線ができてから、大阪、東京グループがいっしょにそれで帰ったこともある。田中宏先生がいっしょだった。当時、食堂車があった。みんなでカレーを食べた。コーヒーだけ田中先生がおごってくれた。田中先生はすべてに合理的な精神の持ち主でそれがとてもいい。カレーは割り勘だった。別のキセル乗車のときに、食堂車のいちばん奥の席でねばった？こともある。トイレで、ねばったことも・・・・。

●

福岡グループの中心人物は、伊藤ルイさん。大杉栄と伊藤野枝の娘だ。一九九六年、ルイさんが亡くなった。追悼文集に私も次

の文章を書いた。

「人形用の筆をいただいて

ルイさんとお会いしたのは、孫振斗さんの裁判が始まってからですから、一九七一、二年の頃だと思います。

当時学生だった私は、裁判の度に福岡の裁判所に出かけ、こんな活動家？のおばさんがいるのかと、ルイさんをながめていました。

『朝鮮研究』に孫さんへの手紙の形で長文の論文を書かれたとき、「手紙の形でしか書けないのよ」と言われていたのも思い出します。ルイさんが、大杉栄と伊藤野枝の子どもであると友人から聞いたのはそれからだいぶたってからです。

何度かルイさんの仕事場にもお邪魔したことがありますが、一度、タテカン（立看板のこと）をよく書くという話の流れからか、人形用の筆を一本下さいました。人形用の筆が特別であるという講釈も聞きましたが、その内容は忘れてしまいました。よく小学校の習字時間使ったような大きさの筆なのに、大変コシのつよい筆だったことを覚えています。中筆なのに大筆のように、またハケのようにも使える筆でした。神戸学生青年センターの集会の横幕などをずっとその筆で書いていました。さすがに丈夫なその人形筆も寿命がきて、今は残念ながらありません。

数年前、ルイさんの本を読んでいて私の名前がでてきてびっくりしました。福岡で孫縦斗さん支援のデモ。私のシュピレヒコールが、関西弁でとてもよかったと書かれていました。もう四十代後半になってしまった私ですが、七〇年代の青春真っ只中の頃を

思い出します。

阪神淡路大震災のあと、神戸の私を心配してくれて何回も電話をくださったようです。ルイさんはそのことを言われませんでしたが、あとで別の人から聞きました。

その後、箕面忠魂碑訴訟のついでということで学生センターに寄ってくださいました。ゆっくりとお話することができましたが、それが最後になってしまいました。

私は、ルイさんが「ガン宣言」をされたことを知りませんでした。五月二十七日にも別の用事で福岡に行きましたが、また今度でいいやとルイさんに連絡しなかったことが悔やまれました。しかし、七月十三日の福岡中部教会での追悼集会に参加して、有川牧師から五月末ごろのルイさんの闘病の様子を伺い、それもよかったのかなあ、と思えるようになりました。病室でお見舞いの友人と会うとその後で体が更につらくなるというお話でした。

「また飛田さんの文章は……」とルイさんに言われそうな追悼文になりました。「ひださん……」という声をもう聞けないのが残念です。

いつの日か、首尾よく天国で、「あら飛田さん」「あらルイさん」と、声を交わすことができれば嬉しいものです。（神戸市）」（『しのぶぐさ―伊藤ルイ追悼集』一九七七年一月）

●

孫振斗さんの原爆手帳をめぐる裁判は、一九七八年三月三〇日、最高裁で勝訴判決がでた。国側の上告棄却である。私はその後いくつかの裁判にかかわった。が、勝訴は、いまのところこの一件

だけだ。この勝訴が、のちの在韓被爆者救済に大きな力となった。

飛田雄一「続・極私的市民運動の記録」

＜その２＞広島で被爆・孫振斗さんの裁判

2025年8月１５日発行

執筆・編集・印刷・発行　飛田雄一（ひだ　ゆういち）

〒657-0011 神戸市灘区鶴甲 4-3-18-205

e-mail　hida@ksyc.jp